

エジプト先・初期王朝時代の 土器にみられる地域性

山崎 美奈子

はじめに

本論は、ナカダ文化圏として知られる上エジプトを対象とし、土器の器種組成と各タイプの出現頻度、法量の時期的変化を地域間で比較することによって、統一王朝に向けての文化的統合過程を実証的に考察することを目的としたものである。

第1章 先行研究と本論の目的

エジプト文明の誕生となる統一王朝の成立は、南部のナカダ文化が北上して、デルタのプト・マーデイ文化を統合することにより達成されると考えられている。この統合モデルは、考古学的資料からも実証されているが、ナカダ文化圏としてひとくくりにされていた上エジプト内にも地域差が存在することが指摘され始めた。例えば、上エジプト内の3遺跡の住居址より出土した土器の混和材に明瞭な違いが認められている。他にも、アビュドス地域とナカダ地域間の土器に描かれる文様表現の違いが指摘されている。しかし、こうした地域性はやがて消失し、それとともに土器の規格化が生じると言われている。確かに土器の規格化は認められるが、エジプト全土において規格化と地域性の消失が起こったのかという実証的研究はな

く、各地域がどのように文化的に統合されたのかは未だ推測の域を出ない。実際、王朝時代に入っても地域性が存在することが指摘されている。そこで本論では、上エジプトを対象として、土器から文化的統一過程を実証的に明らかにすることを目的とした。

第2章 分析の対象と方法

土器資料は、ピートリによる集成と、その後新たに報告された資料のうち完形あるいは略完形のもので対象とした。遺跡は、ある程度詳細に報告されている16遺跡を対象とした。土器の時期設定はヘンドリックスの編年案に倣い、ヘルワン遺跡とアダイマ遺跡だけは報告書で提示されている編年にしたがった。なお、時期が不明なものは分析の対象から外した。本論で対象とした土器資料点数は、ゲルゼ地域 5069点、バダリ地域 2078点、アビュドス地域 2179点、ナカダ地域 1966点、エルカブ地域 526点である。

分析方法は、器種組成、各タイプの出現頻度、法量の3点であり、これらを地域別、時期別で比較した。土器分類は、4つの器種(皿形、碗形、ピーカー形、壺形)に大別し、さらに各器種の中で細別し、タイプを設けた。結果、50タイプに分類された。対象遺跡は便宜上ゲルゼ地域、バダリ地域、アビュドス地域、ナカダ地域、エルカブ地域の5地域にグループ別けた。時期は便宜上、ナカダI期、II A-B期、II C-D期、III A-B期、III C-D期の5時期に区分した。

第3章 器形の地理的分布状況

本章では、時期別に器主組成と出現頻度の分析結果を提示し、地域間の

類似性の変遷を追った。なお、壺形は隣接する地域間のタイプ共有率と出現頻度の高いタイプから類似性の変遷を追った。結果は以下の通りである。

I期・皿形では、バダリ地域からナカダ地域の3地域は異なる様相を示す。碗形・鉢形では、バダリ地域からエルカブ地域の4地域で、エルカブ地域以外の3地域は似た様相を呈する。ピーカー形では、バダリ地域からナカダ地域の3地域は、同じ様相を呈する。壺形では、エルカブ地域は異なる様相を示すがバダリ地域からナカダ地域まで比較的似た様相を呈する。

II A-B期・皿形では、バダリ地域からナカダ地域の3地域で異なる様相を示すものの、地域差は前時期より縮まっている。碗形・鉢形では、エルカブ地域以外のバダリ地域からナカダ地域の3地域は似た様相を呈する。ピーカー形ではバダリ地域からナカダ地域の3地域で、バダリ地域はわずかに異なる様相を示すものの、アビュドス地域とナカダ地域では似た様相を示す。壺形では、エルカブ地域は異なる様相を示すが、バダリ地域からナカダ地域まで比較的似た様相を呈する。

II C-D期・皿形では、5地域のうち、特にバダリ地域、ナカダ地域は似た様相を示すものの、他の3地域は異なる様相を示す。碗形・鉢形では、5地域でほぼ同じ様相を呈する。ピーカー形では、バダリ地域からナカダ地域の3地域で、バダリ地域はわずかに異なる様相を示すものの、アビュドス地域とナカダ地域では似た様相を示す。壺形では、エルカブ地域からエルカブ地域まで同じ様相を呈する。

III A-B期・皿形では、5地域が似た様相を示す。碗形・鉢形では、エルカブ地域は異なる様相を呈するが、バダリ地域からナカダ地域の3地域は似た様相を呈する。ピーカー形では、エルカブ地域からエルカブ地域にかけてほぼ同じ様相を呈する。壺形では、全5地域で、地域間で類似している側面と類似していない側面が表れ、異なる様相をみせ始める。

III C-D期・皿形では、エルカブ地域がわずかに異なる様相を呈するが、バ

ダリ地域とアビュドス地域は似た様相を呈する。碗形・鉢形では、エルカブ地域からアビュドス地域およびエルカブ地域の4地域で、エルカブ地域とバダリ地域はほぼ同じ様相を呈し、アビュドス地域も極めて類似した様相を呈する。ピーカー形では、エルカブ地域からナカダ地域の4地域でほぼ同じ様相を呈する。壺形では、エルカブ地域からエルカブ地域まで全く異なる様相を呈する。

また、各地域でナカダII C-D期より顕著に認められる「貯蔵壺」と「ビール壺」に焦点をあててみると、どちらもナカダI期のエルカブ地域でまず認められ、時期を下るにしたがい北方の地域でも順に出現するようになる。

第4章 土器の度量

本章では、各器種における土器の器高と口径の関係について地域別に述べた。分析の結果、壺形における器高と口径の関係に顕著な変遷過程が認められ、さらに5地域全てで似た推移が認められた。すなわち、ナカダI期からII A-B期では散布していたが、II C-D期に器高と口径の相関関係が看取され、ナカダIII期では相関関係があるいくつかの大きなまとまりに分化し、エルカブ地域以外の4地域では土器の大型化が認められる。また、ナカダII C-D期の個体数の増加とこの相関性の高さを合わせると、II C-D期の大量生産と規格化が連動していたと考えられた。

第5章 先・初期王朝時代の地域性からみた

文化的統一過程

以上の分析結果を踏まえ、本章では先・初期王朝時代の文化的統一モデ

ルを提示し、従来のモデルと比較検討した。

分析の結果、隣接地域間に類似した様相が認められるのは、交流があったためと解釈した。また、土器の法量に関し、全5地域において、散布していた器高と口径の関係がしだいに相関性を持つようになる傾向は、規格化の進行を示す可能性を指摘した。これらを踏まえて時期的変遷を追ってみると、ナカダⅠ期で交流によりある程度同じ文化を共有していたバダリ地域からエルカブ地域が、ⅡA-B期で交流がより活発になってより類似した様相を呈するようになり、ⅡC-D期では技術面を含めて上エジプトが文化的にはほぼ統一され、ナカダⅢA-B期でもその状態が続くが、ⅢC-D期になると一部の器種に地域色があらわれ、統一された状態が解消されるという流れを描くことができた。

従来のモデルと異なるのは、王朝統一に向けて漸次的に文化的均質が進行するのではない点である。また、先行研究で指摘されているよりも早い段階からある程度の共通性があり、ナカダⅡC-D期に一度共通性が高まって、ⅢC-D期になると地域性が再度生じるという変遷を追うことができた。ただし、ナカダⅡC-D期まで混和材や文様に地域差が認められることを合わせて考えると、土器の器形の共有あるいは統一のあとに製作技術が統一されたとも解釈できる。

よって、ナカダ期の文化的統一過程は、従来唱えられてきた王朝成立に向けて地域差が消失し各地域が統合されるといよりは、地域間の文化的統一度合いの向上であり、その度合いはⅡC-D期に最も高まるが、この統一は政治的統一が達成されたとされる初期王朝時代には継続しなかったと言える。

おわりに

本論では、先・初期王朝時代の文化的統一過程における地域間の共通点と差異を明らかにし、統一過程を実証的に考察することができた。しかし、地域間の資料数の差は否めず、また下エジプトを含めた文化的統一について考察することができなかった。今後はさらにデータを収集し、エジプト全土における文化的統一過程を明らかにしていきたい。